書評

鯖江藩政史研究会刊（竹内信夫編）政午紀行

―間部詮勝領内巡見の記―

三上一夫

鯖江藩政史研究会では、第七代藩主間部詮勝が領内を巡見したさいの公式記録とされる『政午紀行』を印行した。校訂・解説者は、同研究会の竹内信夫氏である。

本史料は、詮勝に随行した藩儒臣芥川希由の記録（現在その原本は見当らない）にかかるもので、明治二十八年に筆写した青柳宗治（旧鯖江藩勘定奉行・郡奉行をつとめた青柳柳塘の長子）の分が現在鯖江市尾形町青柳宗和氏宅に所蔵されており、竹内氏はこの青柳本によったわけである。

この史料には、詮勝が第一回の文政五年二月二十八日から四月三日まで六回にわたり、領内各地を巡見したところをしるすも

ので、その第一のねらいは、「巻之一」の末尾に、「封地村民ノ風俗ヲ見、地勢要害ノ場ヲ按ヘ富戸窮民ヲ詳ニシテ、村長ノ善否ヲ察シ、農耕ノ勤惰ヲ知ル。」と記載するとおり、現地の領民の様々の動向を詳さに見聞するためであった。

巡視した地域は、現在の鯖江・武生両市・今立・池田両町・丹生郡の一部町村を合わせて一五〇カ村に上っており、村の地勢や成立、故事、伝承、史跡、神社、仏閣の由来、産業、特産などを調べている。

従って鯖江藩切っての名君とうたわれた詮勝の民政の一端を知るうえで極めて貴重な史料と思考される。彼は幕末の内憂外患の情勢下で、大坂城代、京都所司代、老中を歴任し、幕閣側にあって甚だ重要な働きをしたが、一方において藩内では、文武両道の振興による藩政改革を推進したことで著名であり、そのさい彼が絶えず民情の的確な把握をめざした政治姿勢が端的にうかがわれて興味ぶかいものがある。

なお同研究会では、旧鯖江藩に関する総合的な調査、研究を進めているが、昭和四九年十二月に『鯖江藩寺社改牒』を刊行しており、『政午紀行』は二回目の刊行物ということになる。

〔A5判・四三ページ、定価八〇〇円、三〇〇部限定版、〕
申込先　鯖江市西山
鯖江市役所内市史編纂室宛